

* * * 地域の中の暮らし * * *

～横浜グループのメンバーが、地域の中の暮らしについて思うことを書きました～

「地域の中の暮らし」

松本真澄

暮らしさは地域との関係なしに成り立たない、のは当然だと思いつつも、その濃淡を考えると、私自身の生活は、つながりが薄い方だったな、と思います。中学校で転校し都内の学校に通っていたので、中学、高校ともに、地元の友だちはいません。大学も職場も1時間以上かかるので、これまた暮らしている地域とは関わりません。職場周辺の地域の方々との方が密にお付き合いしているのですが、あくまで仕事関係の発展で生活丸ごとではありません。そう、よく考えたら、これまででは地域の中で暮らしている実感ってないので。サラリーマンのおじさんと同じです。

もちろん、住んでいる地域は好きですよ。これから衰えていくなかで、ひしひしと地域のありがたみを感じるようになるのは、これからなのだと思います。

地域の中の暮らし

熊沢恵美子

生まれ育った街で、子供たち3人と暮らすようになって、13年が過ぎました。

私の育った頃の街は、道端にタンポポが咲き、駅前の商店街にも季節を感じる木々があり、ツバメが低く飛び交うような、潮の匂いのする町でした。

けれど今は、街路樹の他はデザインされた花壇や鉢植え、舗装された道路にはタンポポやツバメを見かける事はありません。駅前道路の区画整理により、道路幅員が拡大され、当時の建物は一軒も残っていません。高層マンションが増え、潮の匂いも届かなくなり、オリジナルの街らしさは、失われてしまった気がします。

過疎化によるシャッター街は、今や大きな問題になっている事を思えば、夏のシーズンには賑わいを見せるようになった事は、まちづくりとしては成功なのかもしれません。

それでも、もう少しこの街にしかない良さを残して行くことは出来なかったかなと、暖かい季節になると思ってします。

けれど、子供たちにとっては今の街がスタートで、自分の住む街は隣街とは全く違うらしく、私以上にこの街を理解して、私より深く、この街の良さを感じて暮らしているようです。そういった意味では、私は地域の中で根ざした生活を、この13年してこなかったことを改めて痛感します。

その街で暮らすという事は、いかにその街を知り楽しめるかで、きっと日常は全く違うものになるでしょう。一見どこにでもあるような街に見ても、きっとその街らしさはどこかにあって、少しづつですが、新たな気持ちで、建築士として、自分の住む街らしさを発見し、日常に新しい風を吹き込むことが出来たら…と思っています。

地域の中の暮らし

吉田洋子

子育ての中で気づいたことはワンオペ育児ではだめで助けてもらえる人をいっぱい見つけることでした。人から助けてもらうと自分にゆとりが出来るので私も誰かを助けようという気持ちになります。その当時共同保育園と学童保育はそんな中で生まれま若い人もこした。

大変だけどお互いに助け合うネットワークは今でも続いています。現在は反町駅前ふれあいサロンの運営につながっています。担い手も利用する人も障害のある人も年配の人も子どもも楽しくいることが出来る居場所は地域のオアシスになっています。

人は一人では生きられません。地域の中で楽しく生きればよいなと思う今日この頃です。

ぜひぜひ近くにいらしたらサロンにお立ち寄りください。

地域の中の暮らし

石川禮子

地域の中の暮らし湘南茅ヶ崎に住み早40年、考えてみれば女技会と同じですね。40年住んでいるとさぞかし湘南には詳しいと思われがちですが、それがまだまだ知らない事ばかり。こんなことを感じさせてもらえた本に出合いました。

茅ヶ崎の南側の大きな通りには、それぞれ名前がついています。

サザン通り、雄三通り、ラチエン通りなど茅ヶ崎にゆかりのある人の名前がついた通りは有名ですが、東海道線に並行している通りは桜道という名前が付けられています。

桜の木は少ないのですが、その大きな桜の木の近くに。格子窓と縦格子の引き戸が印象的な、こじんまりとした懐石料理のお店「柚の木」があります。この店は作家の城山三郎さんが生前お気に入りの店とNHKのドキュメンタリー番組紹介されていました。

そんな時、10年前に亡くなった義父の本棚から、城山三郎の「湘南 海光る窓」を見つけました。

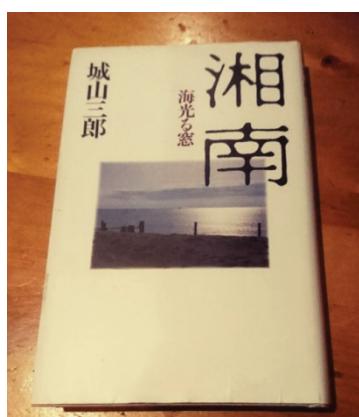
友人から城山三郎を偲ぶ会の例会があるから行かないと誘われ、この会のサブタイトが「海光る」とつけられていました。

早速読み始めると、茅ヶ崎のエッセイであふれていました。その中に柚木のことが書いてありました。「家のちかくに、小さな芸術品ともいえそうな懐石料理を出す店がある。家族だけでこじんまりとやっ

ている店だが、そこで出るお造りは、包丁さばきが良く。こじんまりしていて、醤油にも工夫がある。それに何が出てくるかわからぬたのしみがある。というのも、月毎に変わる献立の中、お造りの項だけが、毎月変わらずただ「相模湾にお任せ」となっている。(文中より) やはり素敵な店がまえは料理まで連想させてくれます。

柚木はやはり敷居が高い店ですが、いつかおとずれるのを楽しみにしたいと思います。

そしてこの本の出会いを運んでくれた、亡き義父と城山三郎を偲ぶ会に感謝です。



地域の中で暮らす～ジチカイの不思議とジョギカイの縁～

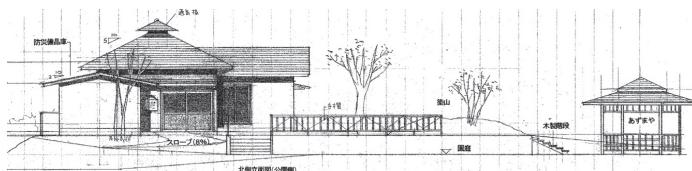
西岡麻里子

自治会に対する私のダークなイメージ。ずっと昔、若かった頃住んでいた地域で班長をやった時の印象です。町内会館の大広間での班長会は大勢の人が肩を並べて座っているのに誰一人喋る人はなく黙ったまま。前の方には年配の男性がズラッと並んでいました。会が始まり前方中央の自治会長さんらしいおじいさんが話し始め、30分ほどで話が終わると班長たちは回覧物を抱えて無言で立ち、順番に退出しました。前に座っていたけれど何も発言しなかったあのおじいさんたちは何だったのかなど不思議でした。今思うと、あのおじいさんたちは自治会の役員さんで回覧物を仕分けし、紐でしばって、大量の座布団を並べてくれていたのでした。月1度の大仕事を終えて、やれやれと思って前に並んでいたのかもしれません。終了後、気心の知れた役員同士でよもやま話を楽しんだのかもしれません。若かった私は、何も見えていなくて、これから1年間、毎月通わなくちゃいけないのか！と憂鬱になった事を覚えています。この時の土地の顔役のようなおじいさんたちと自治会のツマラナイイメージは強烈で、30代はじめだった私はなるべくこういう場所に関わらないで生きて行きたいと心に決めました。

その私が、転居した先で自治会会長のおじいさんに頼まれて、地域の集会所の設計をさせていただく事になったのです。この自治会長と話すようになったきっかけは、女技会のあざみ野企画だったのですから、不思議なご縁でした。「あざみ野企画」展に参加して私は、子どもの頃に当たり前にあった地域はほぼ消滅し、地域がなくても平気で楽に暮らせる世の中になっていた事を初めて自覚しました。でも、それでいいの？という疑問がこのあざみ野企画のテーマだったように思います。若くて元気な人には気楽かもしれないけれど、赤ちゃんからお年寄りまでが快適にくらすためには地域はやっぱり大事なんじゃないか？そう考え行動している人が大勢いる事も知りました。意識的な試みをしている地域がたくさんあり先進事例から多くの事を学ばせていただきました。

それでもいざ自分の地域での集会所の設計となると、私の中のジチカイのダークなイメージが頭をもたげてきました。頭では地域が大事と思っていながら、実は地域や自治会に対する不信感は大きいままでした。トラブルに巻き込まれたらここで暮らしていくなくなる。誰かにイチャモンつけられたらどうしよう。夫や子供を守れるか？という不安もありました。最初の頃はいつでも放り出せるように逃げ腰で地域の集まりに出していました。ところが私のプランは地域の人たちに喜んで受け入れられたのでした。それは私の案がよかったからではなく、この地域の人たちが30年もの間、自分たちの地域の集会施設を！と待ち望んでいたからでした。私がビクビクしながら逃げ腰で提出した設計案は、皆に喜んでいただき、誰もイチャモンをつける人はいませんでした。

集会所立面図



その時の驚き！それはその後、横浜市から助成金を得るために住民皆で頑張った時も、本当に工事が始まった時も、竣工してからも、ずっと続いた驚きでした。自治会っていろいろあるんだ、と今では思うようになりました。この地域は地主さんは少なく、他から転入ってきて40年以上住んでいる人がたくさんいました。第1世代は80代になった今も元気で、若い頃は子ども会でお祭りやハイキングを企画していた人たちでした。50代の役員は、「小憎っこの時から知ってるよ」と80代のおじさまに言われて苦笑。まるで昔の村落のようでした。私の地域デビューを支えてくれたのもこの第1世代でした。新参者も考えの違う人も、柔軟に受け入れてくれる方々で本当に感謝しています。地域の拠点ができたおかげで若手も元気になり、途絶えていた子ども会も復活し、七夕やハロウィンなどを企画してくれています。私のダークな自治会イメージはだいぶ癒されました。

集会所ができた後、一緒に頑張った近所のメンバーと共に私もジチカイの役員になりました。今ではだいぶ古株になりました。私が若かった頃、町内会館で前の方に座ってた「おじいさん」と思った人たちも私ぐらいの年齢だったのかもしれません。でもあの、若かった私が感じた疎外感を忘れないようにしたいと思います。ジチカイの集会では一言も発せず帰る人がいないように。双方向の話し合い、会話のキャッチボールがなければ集まても楽しいとは思えない事を、あの時以来感じているからです。あざみ野企画の時の木村真理子さんの言葉「安心して暮らして安心して死ねる地域を」が印象に残っています。本当にそうだ！と思うけれど、そこに至るにはまだまだ道遠しです。自分のちょっと先でさえわからないし、いろいろ難しい感じる事も多いです。でも大人の遊び場のように「地域」を、今は楽しんでいます。

まち普請助成申請にあたっては女技会の友人、小渡さんにご指導とご協力をいただきました。女技会の縁がこんな形になったことを感謝しています。

最近の利用の様子 →



竣 工：2011年 10月

建 築 主：美しが丘西部自治会

建 物：木造平屋建て約60m²

集会室（大、小） 倉庫、防災備蓄庫

総建設費：約1500万円

建設資金：自治会費30年間の積立+ヨコハマ市民まち普請助成金430万円

「地域のなかで暮らす」

小渡佳代子

子育て時代は土地区画整備事業の分譲地に住み、町内会は昔からの地縁者で構成された町でした。同年代の核家族、子供は2～3人、夫は皆サラリーマンでした。近くに病院や店舗がなく保育所や図書館や文化センター等もなかったので、一種住居専用地域の住宅群は孤立していて、協力し合って暮らさないと子供を育てられなかつた。「生活クラブ」や「私設こども文庫」母親クラブの活動、ガレージセールや子ども会、廃品回収などの運営をしながら自分たちも読書会や美術館めぐりも楽しんだ。

仲間が運営した菜園の恩恵も受け、畠で会話するのも仕事の息抜きになった。子育て、仕事、家事に追われながらも少し歩けばほっとする田園風景、スキップフロアの家は近所の子どもたちが家中走り回って遊んでいた。「僕の家の蔵より小さいけど不思議な家」と農家の子ども。ピロティは集団登校の集合場所、雨の日、幼稚園バスが止まる場所にもなっていた。仕事で家を留守にするときは、夫の両親や実家の母、叔母などに頼み、子どもの同級生の親にもお世話になった。綱渡りであったが、「仕事を続けるなら色々なサポート手段を持ったほうが良い」と女性先駆者のアドバイスが参考になった。地域の仲間と市民研究（長津田に住み続けるために）、プロ仲間とトヨタ財団の市民研究（長津田周辺の歴史と妖怪・神様との間柄）を担当、今は故人となった長老に地元の歴史を丁寧に話していくだけ、年取って宝になっている。

子どもの成長とともに地域との関係はなくなり、スタッフは宅配便の預かり人になっていた。気が付けば自分たちの高齢化と高齢になった親の生活、仕事も続け、人にも来てもらいたいと駅から歩ける商店街の裏街区に移り住み10年を迎えます。市民研究を知った町内会からプロポーザル指名を受け自治会館を設計したが、仕事をしているせいか、繋がりは薄いといってよい。街で会えば「元気」と声を掛け合う友人はいる。地域でCM施工を希望され工事監理に大変苦労したが、地元の男性建築関係者と顔が繋がったように思う。しかし退職した男性とは縁がない。隣近所とは趣味の菜園の収穫をいたくばかりで恐縮している。高齢者の家族から住宅の相談を受けるが、子育ての助け合いとは異なった深刻な悩みが、この地域のなかでくらす高齢者の問題と痛感する。

自分も人間らしく生きたいと自助努力をするが、地域の中でちょっとした助け合いや安心感がもて、公的なサポートも自分らしく受けられたらと願っている。北欧の近代史から感じることは苦境に追い込まれても、知恵を出し合い助け合い自立した精神で乗り越えてきた民族性を感じる。地域の町内会館では老若男女でタイルに絵付けをし、水飲み場、トイレの壁仕上げの一部にした。N自治会館の擁壁にタイルのアートワーク、団地再生の集会所改修増築部分のカフェ看板は若い親子に参加してもらった。下絵はこの地域の昔の話をして子どもたちに描いてもらい作業を楽しんでもらう。地域の人に建物に関わってもらうことを私も楽しんでいる。スタッフとの関係ではなく女技会や士会の仲間と共同で作業することは喜びを共有し苦労は助けられていると感謝している。精神は自分で解放し、暮らしは色々なことがバリアフリーになれば嬉しい。

既存集会所



室内から多目的な
リニアフリー空間に改装



クローズすれば小会議室に利用



子どもたちがタイルで看板造り



10



1

■H25年7月21棟488世帯団地再生スタート
高齢化率40%の団地。隣接公園でのラジオ体操や
ウォーキング、集会所を中心に食事会やダンス、体
操、コーラス等も活発な住民活動を文化資源とし、高
齢になっても快適に暮らしたいと団地の環境をワーク
ショップ等おこない問題をみんなで話し合った。

■H25年10月 管理組合と自治会が連携

25年度団地再生モデル事業に応募し、選定される。団地の将来について、建替えや集会所改修の優先順位を検討した。

■H26年3月団地再生支援事業報告会で発表する。
「子世代が戻ってきたくなる団地にするために」

- ・災害時の避難拠点としての集会所
 - ・子育て支援の拠点
 - ・高齢者の見守りサポートの拠点

H27年4月集会所拠点運営委員会設立・耐震診断

- ・横浜市マンション・団地再コーディネーター支援決定
 - ・トイレは男女別にし、多目的トイレを設ける
 - ・大会議室を通らないで使える動線
 - ・収納を多く設ける
 - ・和室は椅子で使う会議室にしたい。
 - ・いつでも、みんなで気軽に話し合えるサロン
 - ・高齢者の見守り拠点としたい

■28年3月集会所増改築工事竣



地域の中の暮らし

藤本美子

数年前、あざみ野企画に参加させて頂いたときは「皆さん地域と繋がってるなあ。私もそのうち、繋がるのかなあ。」と漠然と思っていました。

「そのうち繋がる」訳が無いです！冷静になって考えれば、当たり前。今の家に引っ越してきて10年以上経ちましたが、近所とは全くと言って良いほど付き合いがありません。子どもが小さい頃は近所の方に声を掛けて頂きましたし、小学生の頃は子供会の会長もしていたので、少しあは繋がっている様な気もしました…が、中学から私学に通わせてしまったので、現在は子どもを通しての付き合いも無し。

町内会自体は活発に活動している模様。先日も「さくら祭り」をしてました。行かなかつたけど。繋がった方が良いんだろうな。とは思っています。でも、どうも入り難い。自分がこんなに人見知りだったとは…。町内会が少し若返ったら、努力してみようかな…。

地域の中の暮らし

岩倉朗子

現在の住まい、本鶴沼の周辺は自治会活動が盛んです。駅前の商店街も、若い人たちががんばっている。でも9年前に越してきたときに子ども達はすでに成長していて地元の学校に通わなかったこともあり、近所に親しい知人もできないまま、今まで来てしましました。きっかけをつかみたいと思って、昨春、自治会班長が回ってきたとき思い切って自治会総会に出席したのですが、周りは親しい人同士で会話の輪ができあがっていて、そこに入れないまま、すごすご退散してきました。

そんな中で、昨夏の義父の在宅療養時に近くの包括支援センターの方や訪問診療医さんにとってお世話になり、改めて地域の方々と繋がることの大切さを実感しました。まだ今のところは、この先どんな形できっかけを掴めるか、掴もうか、迷い続けている状況ですが…。

少し視点を広げると、建築士会子ども部会の活動を通じては、地元の子どもたちとまちあるきをしたり、建物探検をしたりして、まちやたてものや暮らしに興味を持ってもらうきっかけづくりをしてきました。

昨年度は、藤沢宿のまちあるきに地元の中学生に参加してもらい、子どもたちの視点でまとめたレポートを、期間限定サイトで公開するという試みをしました。

サイトは年末まで公開されていますので、のぞいてみてください。そして、機会あれば藤沢宿を歩いてみて頂ければと思います。

<https://kanagawakodomobuka.wixsite.com/mysite>

